



江戸時代に整備された道路が
今も使われている！

城下から延びる 主要街道を行く

久留米地域は広大な筑紫平野と筑後川の豊かな水に恵まれ、古代より政治・経済・文化・交通の要衝として発展してきました。道ができる人と人やモノが行き交い、やがてムラや都市の発展にも繋がっていきます。

江戸時代には久留米城下から藩内の町・村や、他国とを結ぶ主要街道が整備され、その交通網は現在でも幹道として利用されているものが少なくありません。

1 柳川往還

江戸時代には、現在の久留米市役所の東方200メートルに高札場こうさつばが置かれ、その場所を「札ノ辻ふだのつじ」と呼んでいました。ここは久留米城外郭の南東部、当時の片原町と三本松町とが交わる重要な場所で、人々の往来が多い場所に高札場を設置したことが分かります。

関ヶ原の戦いの功により筑後一国を拝領した田中吉政が柳川城に入ると、支城のひとつである久留米城とを結ぶ道路を整備します。この札ノ辻を起点として柳川往還が整備されたのは、慶長8年（1603）のことでした。



札ノ辻の標柱



二ツ橋 (手前が男橋、奥が女橋)



目安町の一里塚 (久留米市指定史跡)

かつての旧西分館(日吉町)の建物前には、現在の道路筋と少し方向を異にする縁石ふちいしが長さ12メートルほどにわたって敷かれており、この縁石が柳川往還の名残です。また南側の三本松公園を整備する際の発掘調査では、江戸時代の道路跡も見つかっています。柳川往還は本町7丁目から西へ折れて直進し、駆け込み寺でもあった池青寺ちせいじの前を通過して二ツ橋を渡ったところに久留米藩の刑場がありました。

札ノ辻から一里(約4キロ)にあたる安武町には「目安町の一里塚」



久留米藩領図屏風 (久留米市教育委員会蔵)

江戸時代の道筋が今も残っている!! 私たちの暮らしに欠かせない「道」。今回は、そこにある久留米藩時代の名残を辿ります。



があります。一里塚はその名のおり、一里ごとに築かれた小高い塚で、旅人にとっては距離の目安であり、木陰が休憩の場でもありました。かつては道の両側に塚がありましたが、県道の拡幅により、東側の塚は現存せず、西側のみ塚の高まりと榎の根元が残っています。



国境石 (小郡市・筑紫野市)



光行土居 (小郡市)

筑後川には江戸時代には50か所ほどの船渡しがありました。その中でも南九州の諸大名も参勤交代に使用した、最も重要な船渡しでもありました。

・府中宿

江戸時代に整備された宿場の一つで、高良社の門前町でもあった高良山の麓に設けられました。参勤交代の大名が休憩や宿泊するための本陣が設けられた他、旅人が宿泊するための木賃宿や旅籠、さらに荷物を運ぶ人足や宿場間を移動する馬の手配もするなど、多くの人が行き交い、物流の拠点としても賑わっていました。現在は地域の手により、江戸時代の屋号を記した立て看板も掲げられています。薩摩街道は府中宿の南端で柳川往還と別れて南下し、浦山丘陵を越えて二軒茶屋へ、さらに高良台丘陵を経て国道209号に到達。

2

薩摩街道 (坊津街道)

長崎街道との分岐点である山家宿(筑紫野市)を起点とし、久留米藩領から熊本を経由して鹿児島城下へと九州を縦断する街道です。街道の名称は地域や時代によって異なり、肥後大道もしくは肥後街道、また鹿児島城下からさらに南西の坊津(南さつま市)まで通じていたことから坊津街道とも呼ばれています。

久留米藩と福岡藩との境には、高さ3メートル余りの筑前・筑後国境石が建っています。当初は久留米から筑後川を渡って本郷村(大刀洗町)を経由し、秋月を抜けて小倉へと通じていましたが、松崎支藩を領した有馬豊範により延宝6年(1678)に松崎街道が整備されて以降、この道が長崎街道となりました。

久留米藩領では松崎(小郡市)と府中(羽犬塚(筑後市))の3宿が設

そのまま南下して羽犬塚へ至るまでは、概ね国道とルートが一致しています。



府中本陣跡 (御井小学校)



府中宿の大鍋屋

3

府中道

西鉄天神大牟田線の安武駅から南西へ250メートルほどの県道沿いに一本の石碑が建っています。現在のものは昭和61年に再建されたものですが、「右高良山ふちう通り ひたこくら」「左くるめ」と刻まれていて、右に進むと府中(御井町)を経て日

けられました。松崎から府中へ向かう途中には古飯や平方など、農村部に商工業者などが集まって形成された在郷町や、下岩田や八丁島などには一里塚の痕跡も見られます。参府街道(後述)との分岐にあたる古賀茶屋から神代の渡しによって筑後川を渡り、府中(御井町)へと至ります。

・神代の渡し

筑後川に設けられた渡しの一つで、すでに13世紀後半の蒙古襲来の際、筑後川に船を並べてその上に板を渡して浮橋を作って渡ったという記録も残っています。



神代の渡し

田や小倉方面へ、このまま県道を直進すれば久留米城下へと向かうことが記されています。ここから分岐して高良山方面に向かう道を府中道といい、今でいえばバイパスの役目も果たしていました。

府中道は安武町の追分から津福今町を経て南町、国分町を抜け、一部は学校や陸上自衛隊久留米駐屯地などにより寸断されていますが、御井町の矢取で薩摩街道に連絡して府中へと至ります。



追分石



国分町から御井町付近の府中道

4 参府街道

大名が参勤交代などに利用した街道を参府街道と呼んでいます。城を出た一行は通町筋を当時の城下町に沿って東へ進み、通外町から筑後川に向かって北上。筑後川の宮地の渡しを経て宮ノ陣に至り、国分寺の北側を通った後は西鉄甘木線に沿うように進んで、古賀茶屋で薩摩街道と合流しました。

また宮地の渡しから西に折れて、宮ノ陣神社の西側を通る一直線の道が今も残っています。西鉄天神大牟田線に並行して走る道路や踏切を横



宮地の渡し

切り、そのまま直進すると思案橋に行きつき、正面には天保14年(1843)に建てられた標柱が残っています。左に行くと肥前街道、右は旧筑前街道で、当時の人々も文字どおり、どちらに行こうか思案していたことでしょう。



宮ノ陣神社の横の旧筑前街道



八丁島付近の参府街道



思案橋付近に建つ標柱

5 日田街道 (豊後街道) 中道

江戸時代の九州統治拠点である永山府政所(日田代官所・大分県日田市)から各地に向けて延びる街道が日田街道と称されています。府中(御井町)から高良山の麓を東に進み、追分(山川町)で分岐し平野部である善導寺、田主丸の街並みを通る道を「中道」と呼びます。

南北朝時代の太保原合戦の戦死者を埋葬した塚と伝わる太郎原一本杉の前から木塚(善導寺町)にかけて、中道往還の雰囲気が残る場所が見られます。筑後川の支流である巨瀬川には、石浦大橋が元禄11年(1698)に架けられました。この石橋が大橋町の名前の由来になり、現在でも、おおはし歴史公園内に移築復元され、往時を偲ばせます。

6 日田街道 (豊後街道) 山辺道

前項の追分から中道と分岐し、そのまま山川の街中を東に進み、草野町を経由して浮羽・日田方面へ向かう街道を山辺道と呼んでいます。この道は概ね現在の県道浮羽草野久留米線と同じルートです。

久留米藩領は筑後国8郡を有していましたが、山辺道には、御井郡と山本郡の郡界を記した郡界標と呼ばれる標石が建っています。



石浦大橋 (福岡県指定有形文化財)



中道と山辺道が分岐する追分に立つ漱石の句碑



善導寺町木塚付近の街道



在郷町の田主丸の街並み



郡界標 (久留米市指定有形文化財)

表面には「東山本郡・西御井郡分界」、裏面に元禄8年(1695)の銘が刻まれています。また在郷町でもある草野には、**構え口**や**寺社**、旧家など、往時の面影を偲ぶ街並みがよく残っています。



田主丸の石垣神社

財政難を理由とする人別銀(人頭税)の導入に反発した、宝暦4年(1754)の一揆では、石垣神社に3万人もの群衆が集まったという。

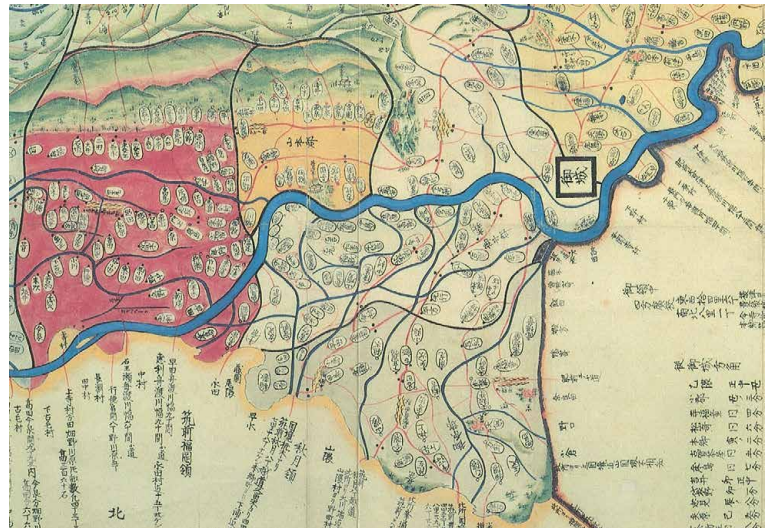


草野町の鹿毛家住宅
(福岡県指定有形文化財)

7 移り変わった道 受け継がれる道

道を作るきっかけは集落間の往来や時間短縮のためのバイパス工事、あるいは軍事目的など様々です。道を整備することは尋常ではない労働力が必要で、決して平坦な道の前ではなかったことでしょう。

舗装されていない農道でも、**轍**のように踏みしめられた場所には雑草は生えません。しかし苦勞して作った道も必要がなくなれば放置され、やがて雑草が生い茂り、ついには道の存在すら忘れ去られていきます。一方で、ずいぶん昔に作られた道が、今でも道路として利用され続けている事例は決して珍しくありません。近所の道をもう一度、見直してみませんか。



筑後国絵図<<部分>>(久留米市史 第2巻より)

令和3年7月1日

◆発行/久留米市教育委員会

◆問合せ/久留米市市民文化部文化財保護課

TEL: 0942 (30) 9322

FAX: 0942 (30) 9714

E-mail: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp